
蝶蝶

墮落螺旋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶蝶

【Nコード】

N7364N

【作者名】

墮落螺旋

【あらすじ】

眠れぬ真夏のある夜の、それは現実と非現実の綴れ織り。

「俺」を巡る、妄想超短編。

眠たいのに眠れないというのは、ある種の拷問みたいなものであり、連日の熱帯夜に快眠している奴の顔が見てみたい。そんなことを考えながら寝返り打つ。・・・あった。となりで眠る女房の顔。序に鼻先でもつまんでやりたい気持ちを抑え、俺、再度背中を向ける。

窓は開いているというのに、一向に風は踏み入ってはこない。思いついたように時折カーテンが揺れるのは、首振り扇風機が息を切らせているせいだ。

「ご苦労さん。お前も大変だな」と慰める。

その時、『カチツ!』と、俺の労いに答えるように動作をやめた首振り。

「どうした?」「どうしたんだ!？」

空気が流れが次第に風に豹変。事態の深刻化を危惧しながら、四つん這いで忍び寄る。

「…なんだ。タイマーが切れただけなのね」

深まる夜の岩陰で、冴えわたる空つぼの頭を掻き毟りながら、俺は仕切りなおしに台所へ行き、タバコを吹かした。冷蔵庫の冷や水を取り出し、嚙下する。夜の静寂に喉が鳴る。嗚呼、ねぶたい、ねぶたい、と。

「こりゃ、やつぱり拷問だわ」

寝床へ引き返し、何かの暗示でも読み取るように天井を睨む。

不意に何かが視界の隅で動いている事に気付いた。焦点が目的物を捉えるまでに、そう時間はかからない。凝視してみると、天井からぶら下がった電球の笠に蝶がいた。

羽は赤色に発光したかと思きや、緑色に。緑色に発光したかと思いきや、赤色に。その色は幾度も明滅を繰り返しながら仄かな光を

放っている。

「・・・美しいなあ。まるで心臓の鼓動に合わせて光を燈しているみたいだ」

俺は、蝶から視線を動かさずに、尚且つ女房を起こさぬようにゆつくりと身を起こした。そして蝶に向かって息を殺し、手を差し延べた。

思いの外、蝶は逃げることなく安易に手のひらに乗った。尚も、その色を羽に明滅させながら・・・。

それから、升酒の表面張力を崩さぬような慎重な足取り（蝶が逃げないように）で、窓際へ行き、カーテンの隙間から蝶を逃がしてやろうと考えた、その時だった。

「カタスギテ・アカナイ！モウチヨット・モウチヨット！！」と蝶蝶。いや、女房が寝言を吐いたのだ。

当然蝶は驚いて逃げた。正確には、ビクッ！とした俺に驚いて逃げた。

蝶はベランダを越え、向かいの通りの白い橋を渡り、やがて俺の視界から消えていった。

女房は依然、すやすやと、そこで寝入っている。

「かたすぎて開かない？」、「もうちよつと？」。俺、反芻。

窓際に立って、もう一度外を眺めてみた。

そこは、人影もなく、車の往来すら窺え知れぬ交差点。にも拘らず、その明滅をひたすら繰り返しながら、信号機がつつ立っているだけだった。

それから俺は、カーテンをしっかりと閉め、拷問に静かな終わりが来ることを祈りながら、目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364n/>

蝶蝶

2010年10月10日07時39分発行